

平成 12 年度東北大学歯学部 A O 入試について

—東北大学 倉元 直樹, 奥野 攻—

1. はじめに

昨年(平成 11 [1999] 年)4 月, 筑波大学, 九州大学と同時に東北大学に国立大学初のアドミッションセンターが発足した。公立大学では岩手県立大学にアドミッションオフィスが設けられ, 平成 12 [2000] 年度入試は国立大学の「A O 入試元年」となった。

A O 入試は, 私立大学ではさらにそれ以上の爆発的な広がりを見せており, 平成 12 年度においては国公立立合わせて 72 大学, 155 学部, 4,970 名の定員で A O 入試が実施されることとなった(野家, 2000)。

「A O 入試」という用語, それ自体は, 平成 2 [1990] 年度に慶應大学湘南藤沢キャンパス(S F C)の発足時に使われたのが起源であると思われる。新しいキャンパス, 新しい学部のスタートに合わせ, 当時は先進的であった, 学力検査を行わない書類審査と面接による入試が行われた。その慶應大学 S F C の入学者選抜方法に対して, アメリカの大学に設置されている入学者選抜担当部局, 「アドミッションオフィス」にちなんで「A O 入試」との命名がなされたことから, 一般にはアメリカの制度をモデルとした入試方法だと理解されているようである。

表 1 平成 12 年度東北大学 A O 入試の概要

区分	対象	定員	出願月	試験日	入学	センター受験	小論文	面接・書類
工学部 I 期	社会人	14 名	H11.7	H11.8.20	H12.4	不要	課す	課す
工学部 II 期	現役生	75 名	H11.10	H11.11.24-25	H12.4	不要	課す	課す
工学部 III 期	浪人も可	100 名	H12.1	H12.2.10-11	H12.4	必要	課す	課す
工学部 IV 期	帰国生他	若干名	H12.6	H12.8.18	H12.10	不要	課す	課す
歯学部	現役生	10 名	H12.1	H12.2.9	H12.4	必要	課さず	課す

しかしながら, 実際に我が国で行われている A O 入試の中身は, アメリカの大学で行われている入学者選抜の内容とは大きく異なっている。また, 具体的な選抜の方針や方法は, A O 入試を実施している大学によって千差万別である。慶應大学 S F C が開発した方式は 1 つの重要な典型例を示していると言えるが, 全ての大学がその方式に追随している訳ではない。また, 「A O 入試 = 慶應 S F C 方式」と公に規定されている訳でもない。A O 入試を実施している各大学は, その実情に応じてそれぞれ独自の方式を開発中であり, また,

それが行政当局からも期待されているのが現状だと考えられる。

東北大学では, A O 入試に対して「自己推薦」, 「一芸」, 「ユニーク入試」などといった特異な位置づけはしていない。むしろ, 入学してから学内教育で要求される水準を高いレベルで達成可能な「基礎学力」の保持を求めることを大前提としている。それに加えて, 明確な志望動機と研究関心, 研究に対する強い意欲を持った志願者を募集する, ということが初年度である平成 12 年度における東北大学の A O 入試の大方針であった。すなわち,

東北大学のAO入試は「学力中心」の極めてオーソドックスなスタンスを取っていると言える。

なお、東北大学の 10 学部のうち、平成 12 年度におけるAO入試の実施学部は、工学部（Ⅰ期～Ⅳ期、定員合計 189 名+若干名）、歯学部（定員 10 名）の 2 学部であった。平成 13 年度にはこれに理学部が加わることになっている。

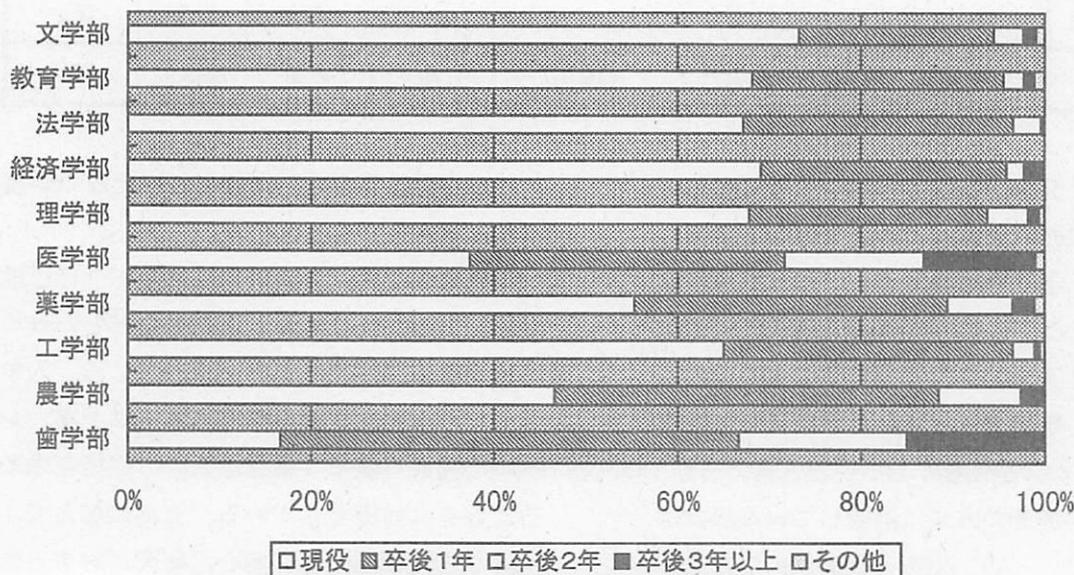
東北大学は「研究第一主義」を標榜しており、AO入試においても第一義的には、将来、第一線で活躍する研究者を志向する若者を求めて入試を行っている。その一方で、前ページの表 1 にまとめた概要に示す通り、試験機会や学部によって実施された入試の内容にはそれぞれの特色と方法上の微妙な違いが見られる。

例えば、歯学部のAO入試とそれと同時期に行われた「工学部Ⅲ期」を比較すると両者の違いが見て取れる。双方とも「書類審査」、「面接」を課し、「センター試験」の成績を

利用する、という共通点はあるものの、歯学部が「現役生」のみを対象として「小論文」を課さない方式であるのに対して、工学部では「現役生」に加えて「浪人生」も対象として、「小論文」を課す、という違いがある。これらの相違は、それぞれの学部がAO入試に期待する学生像と、学部の事情とを反映した結果生じてきたと言える。

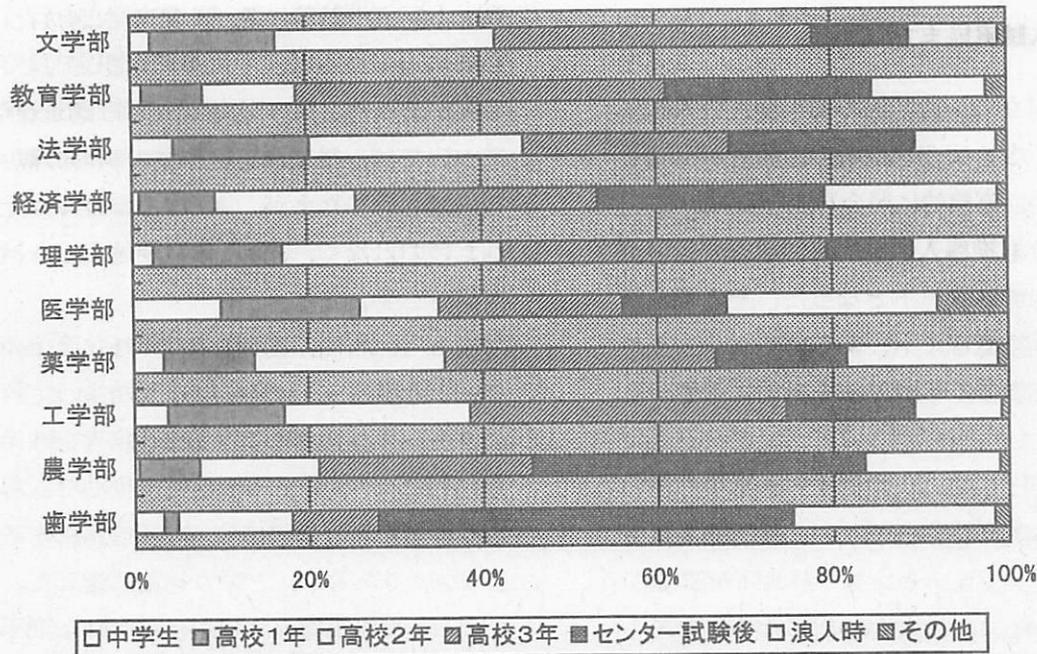
「工学部Ⅱ期」、および、「工学部Ⅲ期」は従来から行われていた「推薦入学Ⅰ」、「推薦入学Ⅱ」をそれぞれAO入試へ移行したもので、工学部には推薦入学に関して 10 年ほどのノウハウが蓄積されている。そこで、工学部のAO入試は平成 11 年度までの推薦入学を基盤にして部分的に改良を加える形で実施された。それに対し、歯学部は前年度までは一般入試のみの実施であり、言わば、ゼロからの出発であった。

本稿は、歯学部の教官と新設のアドミッションセンター所属教官が、互いに協力して初年度の歯学部AO入試の準備、および、実施に至ったプロセスを 1 つの事例として報告する。



「平成 11 年度 入学試験に関する調査(1)」より

図 1 東北大学入学者の学部別現役一浪人比率(平成 11 年度)



「東北大学学生相談所紀要 第 26 号」 p. 24, 表 3 より

図 2 東北大学入学者の学部決定時期 (平成 10 年度)

2. 歯学部における A O 入試導入の背景

東北大学歯学部は、昭和 40 [1965] 年 4 月に東北地方初の国立歯科医学系教育機関として発足したが、入試においては各大学の歯学部に通と考えられる悩みを抱えてきた。

前ページの図 1 は、平成 11 年度の東北大学新入学者の学部別現役-浪人の比率を示したものである。他学部と比較して現役生が少なく、医学部とともに突出して高校卒業後 3 年以上経過したいわゆる多浪生が多いのが分かる。何年もの浪人を経て、あるいは、途中でキャリアを変更して歯学部に入ってくる学生の中には、元々医学部志望の者が多く、結果的にその志が遂げられずに不本意ながら入学して来る者が多い。そのため、入学後に学業に不適応を起こし、留年、休学を繰り返して卒業に至らないケースが目につく。

さらに、図 2 に示すように、東北大学歯学部への志望を決めた時期が「センター試験後」という者が他学部と比較して圧倒的に多いのが歯学部の特徴である。すなわち、最初

から歯科医師、歯学研究者を目指していたのではなく、センター試験の得点を見て戦術的に合格可能性の高い進路ということで東北大学歯学部を選び、入学してくる者が少なからず存在しているのが現状である。

以上のような問題点を克服するためには、歯科医学に対して明確な動機を持つと同時に、入学してからの教育に充分耐えられるだけの学力水準を持った受験者を集めることが必要であることが認識されてきた。様々な議論の結果、その目的を達成するための最適な手段として、東北大学に新たに導入される A O 入試が選ばれたのである。

東北大学歯学部の入学定員は 60 名である。従来は、前期試験に 50 名、後期試験に 10 名という配分での入試を行ってきた。平成 12 年度入試においては、前期定員 50 名中の 10 名を A O 入試に割り振り、対象を現役生に絞って実施することとなった。

3. AO入試実施までの準備

上述のように、歯学部の中年度AO入試においては、どのような性質の志願者が出願してくるのか、直接的に照合可能な資料がなく、歯学部自身も推薦入学等の特別選抜の経験がない状況でのスタートとなった。そこで、経験不足を補う意味でも、あらゆるケースを想定して可能な限りの対処法を事前に準備することとした。

役割分担としては、検討すべき事項の洗い出しは基本的に歯学部で行い、検討作業は歯学部とアドミッションセンターが共同作業で行う形を取った。なお、検討のために参考とした主な資料は過去10年間の歯学部一般入試の実施結果に関するデータである。

具体的には、AO入試が実際にスタートするまでに以下の諸点についての検討を行った。

3-1 新たに加えた選抜資料の扱い

平成12年度歯学部AO入試で用いた選抜資料は「センター試験」、「面接」、「書類(調査書、志願理由書、志願者評価書)」である。このうち、「面接」は後期日程で従来から行われていたものであるが、志望動機や意欲を問う程度のものであり、時間も比較的短かった。また、「書類審査」は今回新たに加わったものである。

まず、「面接」、および、「書類審査」が具体的に合否に与える影響について、合否入替り(清水、1995; 平・池田、1994)の考え方を援用したシミュレーション分析を行った。その結果、選抜資料の中でそれぞれの資料に対する適切な重みについて、過去のデータに基づく結論が導き出された。

3-2 志願者多数の場合における第1次選抜の基準

全国的にAO入試が注目されている状況での実施であったために志願者が殺到して、書

類とセンター試験に基づく第1次選抜を行う必要に迫られる状況も、事前に想定しておく必要があった。第1次選抜を行う適正な倍率については、従来は実施作業の制約の観点から決定されてきたが、AO入試においてはそれだけではなく、逆転合格の可能性からも検討することとした。

過去10年間、後期日程で行われた面接のデータを資料として分析を行った結果、定員の2倍~3倍程度の第1次選抜合格者を確保しておけば、逆転合格の可能性が少しでもある受験者を第1次選抜の時点で不合格にすることはないのであろう、という結論に達した。これは、実施作業面の負担から導かれた倍率とも結果的に一致するものであった。

3-3 志願者少数の場合における合否判定基準

逆に、平成12年度が実施初年度であるために、東北大学歯学部のAO入試の存在がほとんど受験生に知られず、十分な数の志願者が集まらないケースについても想定しておく必要があった。その場合、学力水準から見て、センター試験がどの程度の成績であれば入学後の教育に重大な支障を来さないと考えられるか、という問題を中心に検討することとした。なお、平成12年度においては、合格者が定員に満たない場合にはその分を前期日程の定員に組み入れることとなっていた。

学力基準設定の方針として、一般入試の前期日程、または、後期日程の最低合格ラインの得点を概ねクリアしていることを目安とすることとした。しかし、AO入試は前期日程の試験よりも先に行われるため、合否判定の時点で当該年度の一般入試の合格最低水準はまだ分からないことになる。AO入試の合否判定の時点で入手可能なセンター試験に関する統計的資料は、大学入試センターから発表される全受験者の科目別の平均点と標準偏差のみであるので、それを利用して推定を行う

こととした。

なお、この点に関しては、現在の学習指導要領に基づくセンター試験が行われるようになったデータが参考になると考え、平成 9 年度～平成 11 年度という最近 3 年間のデータのみを参考とした。

表 2 平成 12 年度東北大学歯学部入試科目

A O 入試	センター試験：5 教科 7 科目 (理科 2 科目)
前期試験	センター試験：5 教科 6 科目 個別試験：数学・理科・外国語
後期試験	センター試験：5 教科 6 科目 個別試験：数学

いくつかの基準を作成して相互に比較検討したところ、前期試験の最低合格ラインは年度によるばらつきが少なく、それを比較的安定した形で示すことができることが分かった。なお、表 2 に示す通り、A O 入試は一般入試よりも理科を 1 科目多く課すので、A O 入試と一般入試の成績の直接的な比較は原理的に不可能である。しかし、それでもおおよその目安を導くことは可能であるとの結論に達した。

3-4 面接の方法について

先述したように、従前から歯学部の後期試験では面接を行っていたが、A O 入試ではさらに面接を重視する方針を採った。その結果、複数の面接チームを形成し、1 人の受験生について異なる観点からの面接を 2 回行うこととした。事前に質問事項と評価観点に明確な目的を設定して構造化された面接を行うため、面接の方法と面接員に対する注意事項について協議し、検討を重ねた。

4. A O 入試実施結果の概要

まず、平成 12 年度の入試では、10 名の定員に対して 29 名の出願があり、定員通り 10 名の合格者を出した。結果的に、第 1 次選抜

を行うことも定員に満たない人数の合格を出す必要もなかった。なお、実際には利用することがなかった合格最低ラインの目安値は、前期試験の 50 位以内でセンター試験の得点が最低であった者の成績に対して、結果的に 5 教科 6 科目換算で 7 点低い値であった。したがって、ほぼ満足できる推定であったと言える。

表 3 A O 入試合格者センター試験最低得点

対前期合格者最低得点	+31 点
対前期受験者 50 位以内最低得点	+38 点
対後期合格者最低得点	-3 点

次に、理科 2 科目のうち低得点の 1 科目を除いた 5 教科 6 科目のセンター試験成績を、前期試験、および、後期試験受験者のデータと比較した。その結果、表 3 に示す通り、A O 入試の合格者のセンター試験最低得点は、前期試験の合格者の最低得点よりかなり上であり、後期試験の合格者の最低得点とはほぼ同じ水準である事が分かった。また、5 教科 7 科目換算での合格最低ラインを 55 点上回っていた。したがって、少なくともセンター試験の成績で学力を推し量る限りでは、A O 入試の合格者が一般入試の合格者を下回ることはなかった。

「現役一浪人」の比率については、合格者に占める現役生の割合が飛躍的に向上した。A O 入試の対象者を現役生に限ったため、一般入試で合格する現役生の比率が減少することも懸念されていたが、平成 12 年度の場合、それは杞憂であった。一般入試を含めた全体で、合格者に占める現役受験者の比率は 46% となり、前年度と比較して 29 ポイント上回る結果であった。

面接については、それぞれの面接チーム内での各面接員の評価が十分に一致していたとは言えなかった。しかしながら、異なる面接チームの間の相関係数は信頼性の希薄化を修

正しても十分に低く、それぞれ別の観点で評価が成されていたことが裏付けられた。

5. まとめ

高校以下の教育の多様化が浸透した現在の状況では、AO入試が広範に広がることにより、広い意味での学力基盤と学習に対するインセンティブを低下させて将来の教育的インフラに対して悪影響を及ぼすことが懸念されている。大学が研究・教育を目的とした機関である以上、志願者に対してその目的に合致したレディネスを求めていくことは大切であり、また、必要なことでもある。

その一方で、入学試験で1点でも高い得点を取ることにのみ心血を注ぐような悪しき受験勉強は、本来の意味での大学教育のためのレディネスを高めることにはならない。その双方の観点からの要求を整合的に満たすAO入試の目的と方法はいったいどのようなものであろうか。AO入試の現場には大きな課題が突きつけられていると言える。

ここで重要なのは、アドミッションセンター、アドミッションオフィス等と呼ばれているAO入試担当部局のあり方であろう。アメリカのアドミッションオフィスは純粋な事務組織であり、入学者選抜の実施に特化した機関である。それに対して、平成12年度4月に発足した北海道大学のケースも含め、少なくとも国公立大学のAO入試担当部局には教官が配置されている。この事実は、それらの部局が毎年のAO入試の実施のみに特化した機関ではなく、言わば「日本型AO入試」と言えるようなものを模索し、構築していくための研究機能を付与されたことを意味している。

東北大学歯学部AO入試は端緒についたばかりであり、その評価が実質的に明らかになるまでは少なくとも数年の歳月が必要になると思われる。しかしながら、入学後に学生を教育する部局である歯学部と入試を専門に

研究する部局であるアドミッションセンターとが協力して、データに基づきながら具体的に問題を検討し、よりアカウンタブルな選抜方法の開発を目指して改善していくための体制作り着手することが出来たことは、現時点までの大きな成果であったと言えることができる。

今後は、初年度AO入試の実施結果を様々な角度から評価検討し、今後の実施方法の改善につなげていくことが課題である。

文献

野家彰 2000 大学入学者選抜の現状(資料), IDE・現代の高等教育, No.416「これからの入学者選抜—アドミッションポリシー」, 63-71.

清水留三郎 1995 入学者選抜における試験の効果の評価—合否入替り率等を中心に—(第1報), 大学入試研究ジャーナル 第5号, 1-4.

平直樹・池田輝政 1994 入試課目の効果に関する新しい評価法, 大学入試研究ジャーナル 第4号, 40-44.

東北大学入学試験委員会研究委員会編 1999 平成11年度 入学試験に関する調査(1)

東北大学学生相談所 1999 平成10年度新入生意識調査, 東北大学学生相談所紀要, 第26号, 23-32.